

「群小区画墓」の終焉期 (2)

——「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討——

渡 辺 修 一

1. はじめに

前稿(註1)以来2年を経過したが、その間も奈良時代から平安時代初期の所産とされる「方形周溝遺構」の例数は県内外で増加の一途を辿っている。しかも昨今は明確な埋葬施設を遺存するものもかなり検出されるようになった。もはやその墳墓としての性格は疑うべくもないが、反面後期古墳との性格的差異は益々不明瞭になりつつあると言える。

ところで、「方形周溝遺構」に伴う埋葬施設の資料が増してきたとは言え、大半がごく最近の調査に係るものであり、しかも殆どが公表されていない。そこで小稿では当センターが調査を行った埋葬施設を遺存する「方形周溝遺構」のうちのいくつかを紹介し、それらが提起する問題点に若干の検討を加え、「方形周溝遺構」の調査・研究における一つの方向性を模索してみたい。

2. 埋葬施設を遺存する「方形周溝遺構」

明確な埋葬施設を遺存し、かつ8世紀以後と推定される例を検出した遺跡を列挙すれば以下の通りである。

I 直葬土壌

- (i)千葉市辺田町 辺田山谷遺跡 1基(註2)
- (ii)千葉市大金沢町 六通神社南遺跡 1基
(註3)
- (iii)千葉市都町 兼坂遺跡 2基(註4)
- (iv)市原市押沼 押沼大六天遺跡 1基(註5)
- (v)多古町一畝田 空港Na11遺跡 1基(註6)

II 横穴式石室類似の施設

- (i)千葉市誉田町 鈴子遺跡 1基(註7)
- (ii)四街道市物井 御山遺跡 1基(註8)

III 地下式墳類似の施設

- (i)千葉市大金沢町 六通神社南遺跡 1基
- (ii)市原市草刈 川焼台遺跡 1基(註9)
- (iii)市原市番場 ナキノ台遺跡 2基(註10)
- (iv)市原市潤井戸 下鈴野遺跡 1基(註11)

(v)市原市小田部 小田部新地遺跡 1基(註12)

(vi)市原市加茂 台遺跡C地点 1基(註13)

(vii)市原市加茂 御林跡遺跡 1基(註14)

(viii)市原市惣社 天神台遺跡 4基(註15)

IV 有天井土壌(註16)

千葉市兼坂遺跡2基、六通神社南遺跡3基等地域的な偏りがあるとは言え、管見に触れたものだけで上記の如き多数にのぼる。では次に、各種別毎に簡単な紹介と検討を行ってみたい。

I 直葬土壌

これらは明らかに2種に分けられる。火葬を想定せしめる小規模なもの、古墳における木棺直葬と基本的に同一のものである。前者の例としては千葉市辺田山谷遺跡001号址(仮称、第1図-1)が挙げられる。辺田山谷遺跡は同市鈴子遺跡と同一台地上に存在し、連続する墓域であったと考えられ、「方形周溝遺構」は計14基検出された。主体部を遺存した001号址は中でもやや規模の大きいものであった。土壌は中央やや東寄りに営まれ、約1m×1mの不整形を呈する。副葬品として直刀一振が出土した他、8世紀後半の年代を与え得る須恵器が出土。また墳底にはピットが穿たれ、納骨に関わる施設である可能性も考えられよう。この主体部と規模の上で近いものに押沼大六天遺跡092号址があり、やはり約1m×1mの掘方の中に粘土を用いて槨室が造られ、骨粉を遺存していた。時期も辺田山谷001号址と大差ないとされる。

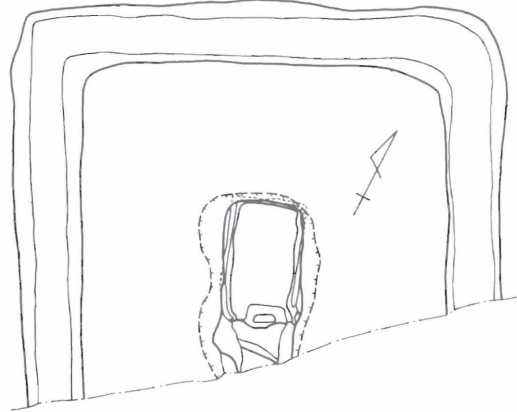
一方、他の3遺跡では木棺直葬土壌が検出されている。多古町例を除いて時期決定の根拠を持たないが、いずれも8世紀代の所産である可能性が大きい。もしそうであるなら、8世紀後半に火葬が導入されて主体部の規模も簡略化されたと推察することも可能となる。

II 横穴式石室類似の施設

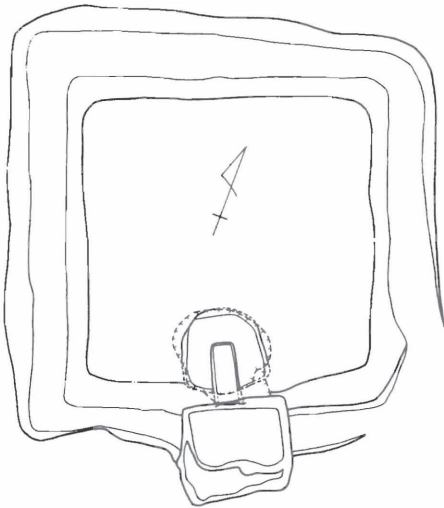
今のところ2例しかない。ここでは横穴式粘土室と言うべき千葉市鈴子遺跡004号址は捨象し、



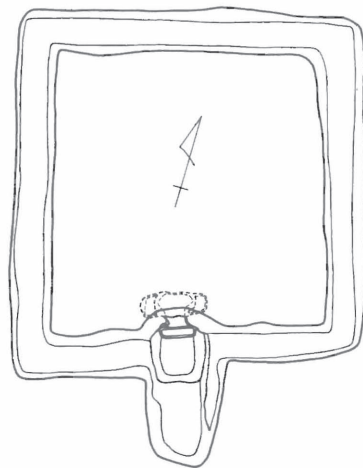
1. 千葉市辺田山谷001号址



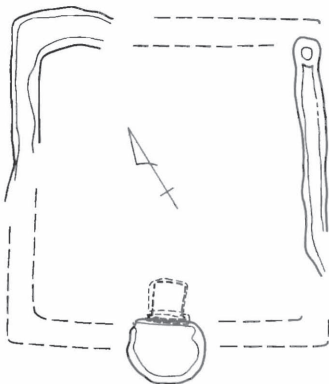
2. 四街道市御山047号址



3. 市原市ナキノ台096号址



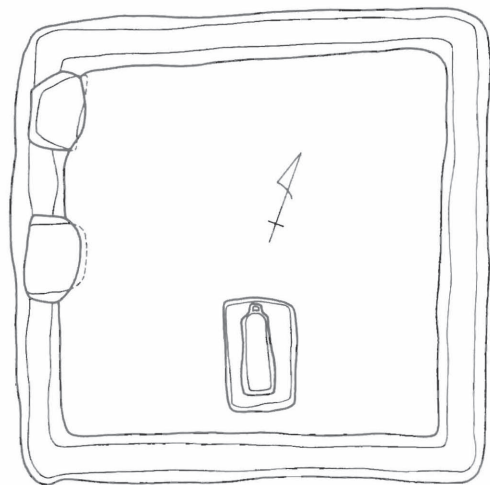
4. 市原市ナキノ台090号址



5. 市原市川焼台174号址

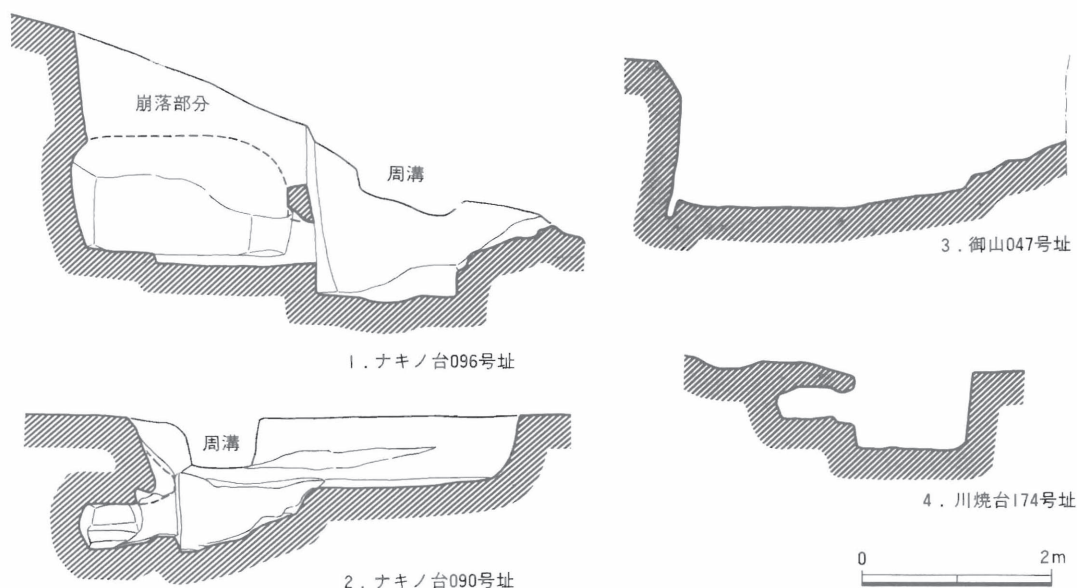
1~4、6 約 1/200

5 約 1/150



6. 千葉市兼坂第1号周溝

第1図 埋葬施設を遺存する「方形周溝遺構」



第2図 埋葬施設断面(約1/80)

四街道市御山遺跡047号址について紹介しておく。

御山遺跡では現在までに円墳7基、方墳3基、「方形周溝遺構」11基、単独の有天井土墳墓2基が調査されている。唯一主体部を遺存した「方形周溝遺構」である047号址(第1図-2, 第2図-3)のそれは他に全く例を見ないものであった。即ち、掘り込みの形状は横穴式石室と殆ど同一であるが、石材を用いた痕跡は全くなく、玄室側壁、奥壁下に巡る溝から判断すれば、板材で玄室を構築していたと考えられる。玄室部の掘り込みが深いため、羨道には階段状の構造を持っている。天井部の構造は不明である。時期は不詳であるが、御山遺跡においては7世紀末に墳形が円形から方形に転じていると思われ、しかも方墳に比べ規模がかなり縮小されていることから8世紀代の所産と見て大過ないと考えられる。

Ⅲ地下式墳類似の施設

近年調査例が相つぎ、「方形周溝遺構」の調査では最も目立つ成果の一つと言える。形態はバラエティーに富むが、大きくは2～3種に分類できる。

市原市ナキノ台遺跡では方墳2基と共に「方形周溝遺構」10基が調査されたが、うち3基に主体部が遺存し、2基が地下式墳類似の施設を有していた。096号址(第1図-3, 第2図-1)は一方のタイプの代表例と言える。主体部は南溝中央

に方形の竖坑(というより前庭部?)を掘り込み、そこから狭い入口部を経て一辺約2mの隅丸方形を呈する玄室に至る。天井部は崩落して正確な形状は不明だが、各壁面からのカーブから判断すればややドーム状をなしていたと思われる。また入口から続く約1.6m×0.7mが長方形の凹みとなっている。本址は斜面に構築されていることもあって、地下式墳よりも横穴墓に近い印象を与える。

同じナキノ台の090号址(第1図-4, 第2図-2)では、やや形状の異なる主体部を持つ。やはり南辺中央に構築され、周溝から長く張り出した前庭部の中に竖坑を掘り込むが、玄室は幅こそあるものの奥行、高さ共に狭く、成人が入室することは極めて困難である。玄室内は左右両側が棚状に高くなっており、中央に骨片が遺存した。

同様に小規模な玄室を持つものに、ナキノ台遺跡の西方約1.5kmに所在する市原市川焼台遺跡174号址(第1図-5, 第2図-4)がある。周溝の全容は不明であるが、南辺中央に竖坑を掘り込み、約70cm四方の玄室を設ける。玄室の高さは30cm強でもはや子供も入室できない。玄室内にはやはり骨粉が遺存した。

最初に紹介したナキノ台096号址の主体部は、半田堅三の地下式墳の分類(註17)によれば有段Ⅲ類に相当し、また後二者のように玄室の小規模なもの

については市原市荒久遺跡の例を挙げて、有段Ⅲ類に類似するが地下式墳の範疇には含めないとしている。そして小規模な玄室を持つものが発達して有段Ⅲ類に至るとされる。しかし今日、両者が時期的にも（8世紀代の可能性が高い）性格的にも共通したものとして検出され続けている以上、別範疇で捉えるのは意味のあることとは思えない。また有段Ⅲ類の地下式墳は現在のところ市原市域に集中しているが、これは県内では市原市以南に集中的に分布する横穴墓との関連を無視し得ないであろう（註18）。筆者は「方形周溝遺構」を導入されたこれらの施設を次のように考えたい。

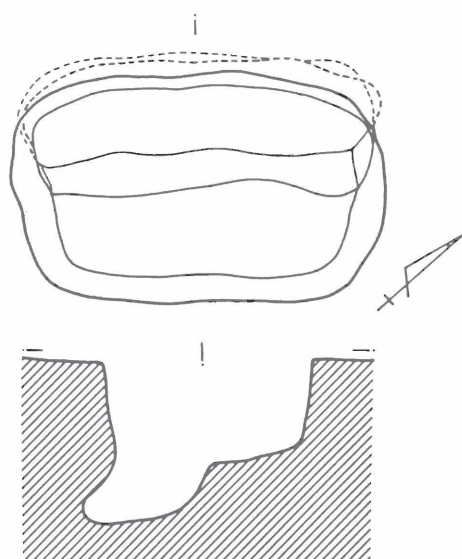
8世紀のある時点で墳墓構築の省力化を迫られた際、意識としては横穴式石室を継承しながら、形態的には横穴墓を模倣して有段Ⅲ類の地下式墳が出現する。そして火葬が導入されたものでは先述のような簡略化された小規模な玄室を持つものが造られたのではなかろうか。ことによると、御山047号址に見られた半地下式とも言える施設も無関係ではないかも知れない。勿論、これらが周溝を失って後、どのように中世の地下式墳につながっていくのかはまた別に検討されねばならないが……。

IV 有天井土壇（第3図）

古くは千葉市兼坂遺跡の報告例があり、最近では千葉市六通神社南遺跡の調査例がある。

兼坂遺跡では第1号周溝（第1図-6）と第2号周溝の2基の「方形周溝遺構」が調査されたが、そのいずれもが中心的位置に木棺直葬土壇を持ち、また周溝内に天井土壇を設けている。さらに単独の有天井土壇も1基存在した。これに類似した状況は六通神社南遺跡でも見られる。ここでは計37基もの「方形周溝遺構」が検出された（第4図）が、3基に有天井土壇が伴い、また単独の有天井土壇が2基存在した。兼坂例は時期が不明であるが、六通神社南の遺構群は8世紀（後半か？）の所産と見られる。

さてこれら有天井土壇が周溝内に築かれる例から注目されるのは後期古墳における周溝内土壇である。後期古墳の周溝内土壇についてはこれまで殆ど問題にされてこなかった故か報告例としては多くないが、筆者の経験も含めて最近の調査ではかなり普遍的に検出されるようである。特に第5図に示した佐倉市立山2号墳（註19）などのよう



第3図 有天井土壇
（佐倉市立山第5号土壇 約1/40）

に有天井土壇の先駆と考えられる例も存在する。佐倉市星谷津遺跡（註20）では、出土遺物より有天井土壇に8世紀後半の年代が与えられ、一般にはこの時期に盛行するのであろうが、この埋葬施設が古墳の周溝内土壇から派生した発展形態であることはほぼ間違いないであろうし、またそれが奈良時代以後にも引き継がれたと推察される。

3. 埋葬施設の位置の問題

「方形周溝遺構」の埋葬施設は前節で見たように多様性に富むが、遺構内においてそれらが占める位置は次のような分類が可能であろう。

- A 墳丘内埋葬……直葬土壇、横穴式石室類似の施設、地下式墳類似の施設。
- B 周溝内埋葬……有天井土壇。

またこれは後期古墳においても全く同様に論じることができる。即ちAとして墳丘内の木棺直葬土壇、横穴式石室、箱式石棺など、Bとしては周溝内土壇がある。両者には、視覚上の位置もさることながら、構築時の簡便さに著しい差が存在する。よってこれらを次のように言い換えることができる。

- A 中心的埋葬……遺構築造の契機となるもの。あるいはそれに準ずるもの（追葬、もしくは墳丘内における新たな埋葬施設の構築）。



第4図 千葉市六通神社南遺跡(約1/2,000)

B 従属的埋葬

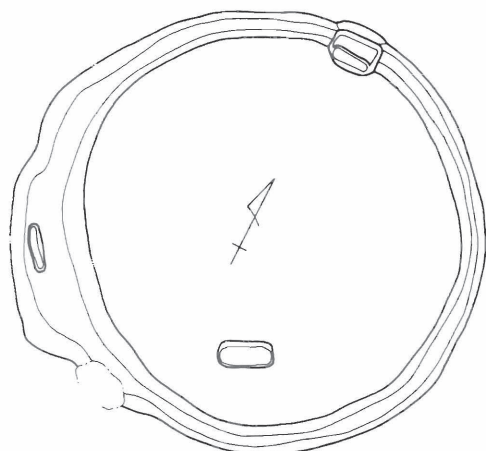
六通神社南遺跡などで明らかにされた事実によって、A、B両者の関係が、後期古墳以降も基本的に継承されたとの想定が可能となり、「古墳」から「方形周溝遺構」への連続性の裏付けがまた一つ得られたことになる。ところで、古墳時代から奈良時代にかけて、両者の関係に継続性が認められるとは言え、全く何の変化もなかったのではあるのか。ここでも有天井土壌に注目してみたい。

後期群集墳の場合、古墳(「区画墓」)だけで群集する場合が多く、小規模な「円形周溝」などが存在することはあっても、単独の土壌墓(「区画墓外埋葬」と言ってもよい)が群中に見られるものは少ない。逆に「方形周溝遺構」群の場合、単独の有天井土壌を含む土壌墓が群中に複数存在することが多い。先に触れた佐倉市立山遺跡や四街道市御山遺跡では、後期古墳、「方形周溝遺構」、単独の土壌墓がすべて存在するが、有天井土壌墓を中心とする「区画墓外埋葬」は(直接時期決定し得る手段を持たないものが殆どであるが)、「方形周溝遺構」が群集する地点に(より新しい群中に)多く(あるいはすべてが)見られる。つまり時期が新しくなるにつれて従属的埋葬が「区画墓」内から排除される、もしくは独立する傾向が読みとれるのである。この現象が持つ意味を現時点で考察

するのは難しい。従属的埋葬の主体者が「区画墓」の造営単位(基本的再生産単位?)内の従属的成員であろうことは言えても、「区画墓」造営単位の実体が明らかになっていないからである。単に未成年者等の従属的成員であるのか、また「世帯共同体」内の従属的世帯成員であったのか。すべて今後の、しかも解決の困難な課題とする他ない。

4. 結語

以上、「方形周溝遺構」における埋葬施設とその提起する諸問題について述べ来った。単なる問



第5図 佐倉市立山2号墳(約1/400)

題点の羅列に終始した感があり、時には論理の飛躍もあったろう。資料が増加してきたとは言え、現時点ではまだ不十分であり、議論は「可能性」の枠を抜け出すことができない。

またここで触れられなかった問題も数多い。例えば、「方形周溝遺構」が消滅する時点をどう解釈するかという問題は、極めて重要である。かつて石部正志は、群集墳の成立よりもその衰退、消滅の現象の中にこそ鋭く激しい社会の転回が求められると述べた(註21)。筆者はその卓見に大いに賛同するものであるが、では「方形周溝遺構」の消滅が意味するものは一体何なのか。もう一点、筆者はこれまで「方形周溝遺構」という括弧付きの呼称を用いてきた。これはあくまで暫定的な呼称としてきたつもりであったが、もはや後期群集墳からの継続性を持つ墳墓であることが明らかになっている以上、より相応しい呼称を与えるべき時機に来ているのではないか。実際、今回用いた資料の中には「古墳」と呼んだ方がよいものもある。これは「古墳」の定義と共に、時代区分の問題とも関わってくる。「古墳時代」という時代区分それ自身の出発点から見直さなければ、次に来る時代区分と整合しないのではないか(註22)。歴史学の一分野を担う我々はこの不整合面を放置しておいてよい筈はない。これらの問題については、機会があれば再び論じることをここに約しておきたい。

「方形周溝遺構」はこれまで比較的軽視されがちであった。小稿がこれらの遺構について幾許かの問題提起となればその目的は達せられたと言える。今後の資料の充実と研究の進展を期待したい。

註

- 1) 拙稿「群小区画墓」の終焉期 ―所謂「方形周溝遺構」をどう見るか― 『研究連絡誌』第6号 千葉県文化財センター 1983
- 2) 1984年度 調査研究員柴田龍司調査
- 3) 1983年度 調査研究員今泉潔、山田貴久調査 『千葉県文化財センター年報』No.9 1984
- 4) 『京葉』 千葉県都市公社 1973
- 5) 1984年度 主任調査研究員小宮孟、調査研究員金子進調査
- 6) 1985年度 調査研究員小高春雄調査
- 7) 『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』 千葉県文化財センター 1976

- 8) 1985年度 主任調査研究員加藤正信、調査研究員澤野弘調査
- 9) 1984年度 調査研究員金丸誠、金子進調査
- 10) 1983年度 調査研究員上守秀明、筆者調査 『千葉県文化財センター年報』No.9 1984
- 11) 1985年度 市原市文化財センター調査 『私たちの文化財』2 市原市文化財センター 1985
- 12) 1983年度 市原市文化財センター調査 山口直樹氏、近藤敏氏らの御厚意により実現
- 13) 『上総国分寺台調査概報』 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教委 1979
- 14) 註13文献に同じ
- 15) 1982年度 上総国分寺台遺跡調査会調査 1983年度 市原市文化財センター調査 浅利幸一氏御教示
- 16) 『佐倉市星谷津遺跡』 千葉県文化財センター 1978 で「土壇墓の一変形」として注目されたもの。長方形乃至長楕円形土壇の一方の壁側を横穴状に掘って墓室を造る。呼称が統一されていないが、筆者は「有天井土壇」が今のところ妥当であると考えている。
- 17) 半田堅三「本邦地下式墳の類型学的研究」 『伊知波良』2 伊知波良刊行会 1979
- 18) 実際、東京都府中市の有段Ⅲ類例では、玄室内の敷石や河原石を用いた閉塞石が見られることより、横穴墓からの変遷が考えられている。雪田孝「東京都府中市発見の地下式横穴」 『考古学ジャーナル』121 1976
- 19) 『佐倉市立山遺跡』 千葉県文化財センター 1983
- 20) 註16文献に同じ
- 21) 石部正志「後期古墳盛行年代の検討 ― 福井県高浜町出土の須恵器資料による ―」 『先史学研究』5 同志社大学先史学会 1965
- 22) 日本考古学の時代区分全般に言える。人類社会における発展段階の指標であるべき時代区分として、先土器、縄文、弥生、古墳…に代わる新たな時代区分がやがて必要となろう。

小稿では未報告の資料を多く扱ったが、各遺跡の調査担当者の方々から、多大な御教示と資料の提供を賜った。記して深謝の意としたい。

(第3班 内黒田事務所)